

# パnulヴェ方程式のベックルント変換群の階層

神戸大学・自然科学研究科 鈴木正樹 (Masaki Suzuki)

田原伸彦 (Nobuhiko Tahara)

Graduate School of Science and Technology

Kobe University

神戸大学・理学部 高野恭一 (Kyoichi Takano)

Faculty of Science

Kobe University

## §1. 内容の概略

各パnulヴェ方程式は (正確にはそれと同値なハミルトンの正準方程式は)、方程式の形は変えないで、方程式に含まれるパラメータを変えるベックルント変換群を許す (参考文献 [2])。本稿の目的は、それら変換群全体に階層構造があること、すなわち、良く知られた方程式の退化操作が変換群の退化をも引き起こしているを確かめることである。

6個のパnulヴェ方程式はそれぞれ多項式ハミルトンニアンの正準方程式

$$P_J: \quad \delta_J q = \{H_J(q, p, t, \alpha), q\}, \quad \delta_J p = \{H_J(q, p, t, \alpha), p\},$$

( $J = VI, V, IV, III, II, I$ ) と同値である。(この正準方程式を第  $J$  パnulヴェ系という。) ここで

$$\delta_{VI} = t(t-1) \frac{d}{dt}, \quad \delta_V = \delta_{III} = t \frac{d}{dt}, \quad \delta_{IV} = \delta_{II} = \delta_I = \frac{d}{dt}$$

で、 $\{\cdot, \cdot\}$  は

$$\{f, g\} = \frac{\partial f}{\partial p} \frac{\partial g}{\partial q} - \frac{\partial f}{\partial q} \frac{\partial g}{\partial p}$$

で定義されるポアソン括弧である。各ハミルトンニアンは変数  $q, p, t$  とパラメーター  $\alpha = (\alpha_0, \alpha_1, \dots)$  の多項式である。本稿で予定している説明に必要なものだけをいく

つか与えておこう：

$$\begin{aligned}
 H_{VI}(q, p, t, \alpha) &= q(q-1)(q-t)p^2 - [(\alpha_0-1)q(q-1) + \alpha_4(q-1)(q-t) \\
 &\quad + \alpha_3q(q-t)]p + \alpha_2(\alpha_1 + \alpha_2)(q-t) \\
 &\quad (\alpha_0 + \alpha_1 + 2\alpha_2 + \alpha_3 + \alpha_4 = 1), \\
 H_V(q, p, t, \alpha) &= q(q-1)p(p+t) - (\alpha_1 + \alpha_3)qp + \alpha_1p + \alpha_2tq \\
 &\quad (\alpha_0 + \alpha_1 + \alpha_2 + \alpha_3 = 1), \\
 H_{IV}(q, p, t, \alpha) &= qp(2p-q-2t) - 2\alpha_1p - \alpha_2q \\
 &\quad (\alpha_0 + \alpha_1 + \alpha_2 = 1).
 \end{aligned}$$

ここで  $H_{IV}$  は [2] のものと係数が若干異なるが、それは退化操作として通常用いられているもの (例えば [1],[4] に載っているもの) を採用するからである。

各パンルヴェ系  $P_J$  ( $J \neq I$ ) のベックルント変換群  $W = W_J$  とは、微分が  $P_J$  によって定義される  $q, p, t, \alpha = (\alpha_0, \alpha_1, \dots)$  の微分函数体  $K$  (例えば有理函数体) の微分同型 (微分と可換な体同型という意味) でポアソン括弧を保つものからなる群である。これより各元は  $P_J$  の形は変えず、パラメータ  $\alpha = (\alpha_0, \alpha_1, \dots)$  を変えるが、単純ルートと見なされるパラメータにはあるアフィン・ワイル群として作用する。例えば  $W_{VI}$  は  $D_4^{(1)}$  型、 $W_V$  は  $A_3^{(1)}$  型、 $W_{IV}$  は  $A_2^{(1)}$  型である ([2])。

ところで良く知られているように、パンルヴェ系全体には退化操作による階層構造がある。すなわち各  $(J, K) = (VI, V), (V, IV), (V, III), (IV, II), (III, II), (II, I)$  に対して、小さいパラメータ  $\varepsilon$  を含む変換

$$\begin{aligned}
 \alpha_i &= \alpha_i(A, \varepsilon) \quad (i = 0, 1, \dots), \\
 t &= t(\varepsilon, T), \quad q = q(A, \varepsilon, T, Q, P), \quad p = p(A, \varepsilon, T, Q, P)
 \end{aligned}$$

が存在し、これをパンルヴェ系  $P_J$  に施したものを  $P_{J \rightarrow K}$  とすると、 $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき  $P_{J \rightarrow K}$  が  $P_K$  に収束する。(この変換は  $(q, p)$  から  $(Q, P)$  への正準変換であるので  $P_{J \rightarrow K}$  もハミルトンの正準方程式である。)

さてベックルント変換群  $W_J$  は上の変換によって  $Q, P, T, A = (A_0, A_1, \dots), \varepsilon$  の微分函数体に働く変換群と見なせる。それをまた  $W_J$  と表すことにする。このとき  $W_J$  の各元である変換は  $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき一般には収束しない。そこで  $W_J$  の部分群  $W_{J \rightarrow K}$  をうまく選んでその極限が  $W_K$  となるように出来ないかということが問題になる。それが可能であるというのが、本稿の主張である。結論からいうと、 $W_{J \rightarrow K}$  としては  $A_i$  ( $i = 0, 1, \dots$ ) の鏡映によって生成される群をとれば良い。

以上から、ベックルント変換群  $W_{VI}$  さえ知っていれば、他のベックルント変換群  $W_J$  ( $J = V, IV, III, II$ ) はそれから形式的に得られるということになる。

第 I パンルヴェ系はパラメータを含まないから、ベックルント変換は方程式を全く変えない変換ということになる。このような変換群として、スケール変換である 5 次の巡回群が知られている。これ以外の非自明な変換が本稿の方法によって  $W_{II}$  から得られるのではないかと期待したが、極限はすべて恒等変換であった。西岡啓二氏によると、スケール変換以外のベックルント変換 (もちろん代数的変換) が存在しないことが、微分代数の方法で、証明されるということである。

以下では、 $(J, K) = (VI, V), (V, IV)$  の場合を調べてみる。前者は退化変換が有理変換であるが、後者は代数的変換であるので注意が必要である。他の場合を込めた詳しいことはプレプリント [4] にある。

本稿のテーマは神戸大学理学部の庵原謙治氏が提起したものである。著者の計算にも多くの助言をしてくれた。ここに深く感謝いたします。

## §2. $W_{VI}$ から $W_V$ へ

ベックルント変換群  $W_{VI}$  は  $s_0, s_1, s_2, s_3, s_4$  から生成される群で各  $s_i$  は  $\alpha_0 + \alpha_1 + 2\alpha_2 + \alpha_3 + \alpha_4 = 1$  を満たす  $\alpha_0, \alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, \alpha_4$  と  $q, p, t$  に次のように作用する：

$$s_0(\alpha_0) = -\alpha_0, \quad s_0(\alpha_1) = \alpha_1, \quad s_0(\alpha_2) = \alpha_2 + \alpha_0, \quad s_0(\alpha_3) = \alpha_3, \quad s_0(\alpha_4) = \alpha_4,$$

$$s_0(q) = q, \quad s_0(p) = p - \alpha_0/(q - t), \quad s_0(t) = t,$$

$$s_1(\alpha_0) = \alpha_0, \quad s_1(\alpha_1) = -\alpha_1, \quad s_1(\alpha_2) = \alpha_2 + \alpha_1, \quad s_1(\alpha_3) = \alpha_3, \quad s_1(\alpha_4) = \alpha_4,$$

$$s_1(q) = q, \quad s_1(p) = p, \quad s_1(t) = t,$$

$$s_2(\alpha_0) = \alpha_0 + \alpha_2, \quad s_2(\alpha_1) = \alpha_1 + \alpha_2, \quad s_2(\alpha_2) = -\alpha_2, \quad s_2(\alpha_3) = \alpha_3 + \alpha_2,$$

$$s_2(\alpha_4) = \alpha_4 + \alpha_2,$$

$$s_2(q) = q + \alpha_2/p, \quad s_2(p) = p, \quad s_2(t) = t,$$

$$s_3(\alpha_0) = \alpha_0, \quad s_3(\alpha_1) = \alpha_1, \quad s_3(\alpha_2) = \alpha_2 + \alpha_3, \quad s_3(\alpha_3) = -\alpha_3, \quad s_3(\alpha_4) = \alpha_4,$$

$$s_3(q) = q, \quad s_3(p) = p - \alpha_3/(q - 1), \quad s_3(t) = t,$$

$$s_4(\alpha_0) = \alpha_0, \quad s_4(\alpha_1) = \alpha_1, \quad s_4(\alpha_2) = \alpha_2 + \alpha_4, \quad s_4(\alpha_3) = \alpha_3, \quad s_4(\alpha_4) = -\alpha_4,$$

$$s_4(q) = q, \quad s_4(p) = p - \alpha_4/q, \quad s_4(t) = t$$

またベックルント変換群  $W_V$  は  $s_0, s_1, s_2, s_3$  から生成される群で各  $s_i$  は  $\alpha_0 +$

$\alpha_1 + \alpha_2 + \alpha_3 = 1$  を満たす  $\alpha_0, \alpha_1, \alpha_2, \alpha_3$  と  $q, p, t$  に次のように作用する：

$$\begin{aligned} s_0(\alpha_0) &= -\alpha_0, \quad s_0(\alpha_1) = \alpha_1 + \alpha_0, \quad s_0(\alpha_2) = \alpha_2, \quad s_0(\alpha_3) = \alpha_3 + \alpha_0, \\ s_0(q) &= q + \alpha_0/(p+t), \quad s_0(p) = p, \quad s_0(t) = t, \\ s_1(\alpha_0) &= \alpha_0 + \alpha_1, \quad s_1(\alpha_1) = -\alpha_1, \quad s_1(\alpha_2) = \alpha_2 + \alpha_1, \quad s_1(\alpha_3) = \alpha_3, \\ s_1(q) &= q, \quad s_1(p) = p - \alpha_1/q, \quad s_1(t) = t, \\ s_2(\alpha_0) &= \alpha_0, \quad s_2(\alpha_1) = \alpha_1 + \alpha_2, \quad s_2(\alpha_2) = -\alpha_2, \quad s_2(\alpha_3) = \alpha_3 + \alpha_2, \\ s_2(q) &= q + \alpha_2/p, \quad s_2(p) = p, \quad s_2(t) = t, \\ s_3(\alpha_0) &= \alpha_0 + \alpha_3, \quad s_3(\alpha_1) = \alpha_1, \quad s_3(\alpha_2) = \alpha_2 + \alpha_3, \quad s_3(\alpha_3) = -\alpha_3, \\ s_3(q) &= q, \quad s_3(p) = p - \alpha_3/(q-1), \quad s_3(t) = t \end{aligned}$$

さて  $P_{VI}$  から  $P_V$  への退化操作を行う変換は

$$\begin{aligned} \alpha_0 &= \varepsilon^{-1}, \quad \alpha_1 = A_3, \quad \alpha_2 = A_2, \quad \alpha_3 = A_0 - A_2 - \varepsilon^{-1}, \quad \alpha_4 = A_1, \\ t &= 1 + \varepsilon T, \quad (q-1)(Q-1) = 1, \quad (q-1)p + (Q-1)P = -A_2 \end{aligned}$$

である。

$$\{P, Q\} = 1, \quad \{Q, Q\} = \{P, P\} = 0,$$

$$A_0 + A_1 + A_2 + A_3 = \alpha_0 + \alpha_1 + 2\alpha_2 + \alpha_3 + \alpha_4 = 1$$

であることに注意する。上の変換より、 $W_{VI}$  の各元は  $A = (A_0, A_1, A_2, A_3), \varepsilon, T, Q, P$  の有理関数体にどのように作用するかは簡単に分かる。例えば  $s_0$  のパラメータ  $A = (A_0, A_1, A_2, A_3), \varepsilon$  への作用は

$$A_0 = \alpha_0 + \alpha_2 + \alpha_3, \quad A_1 = \alpha_4, \quad A_2 = \alpha_2, \quad A_3 = \alpha_1, \quad \varepsilon = \frac{1}{\alpha_0}$$

から

$$\begin{aligned} s_0(A_0) &= s_0(\alpha_0 + \alpha_2 + \alpha_3) = -\alpha_0 + (\alpha_2 + \alpha_0) + \alpha_3 = \alpha_2 + \alpha_3 \\ &= A_0 - \varepsilon^{-1}, \quad s_0(A_1) = s_0(\alpha_4) = \alpha_4 = A_1, \\ s_0(A_2) &= s_0(\alpha_2) = \alpha_2 + \alpha_0 = A_2 + \varepsilon^{-1}, \quad s_0(A_3) = s_0(\alpha_1) = \alpha_1 = A_3, \\ s_0(\varepsilon) &= s_0(1/\alpha_0) = -1/\alpha_0 = -\varepsilon \end{aligned}$$

である。ここで例えば、 $s_0(A_0), s_0(A_2)$  は  $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき発散することに注意する。他の  $s_i$  のパラメータへの作用も同様に計算する。 $\varepsilon \rightarrow 0$  のときの極限においては、

$A_0, A_1, A_2, A_3$  は  $A_3^{(1)}$  型アフィン・リー代数のルートになるべきであるから、これらの鏡映となる  $W_{VI}$  を探すことにする。色々試してみると

$$S_0 := s_0 s_2 s_3 s_2 s_0 = s_3 s_2 s_0 s_2 s_3, \quad S_1 := s_4, \quad S_2 := s_2, \quad S_3 := s_1.$$

がそのようなものであることが分かる。計算により

$$\begin{aligned} S_0(A_0) &= -A_0, \quad S_0(A_1) = A_1 + A_0, \quad S_0(A_2) = A_2, \\ S_0(A_3) &= A_3 + A_0, \quad S_0(\varepsilon) = \frac{\varepsilon}{1 - A_2 \varepsilon}, \\ S_1(A_0) &= A_0 + A_1, \quad S_1(A_1) = -A_1, \quad S_1(A_2) = A_2 + A_1, \\ S_1(A_3) &= A_3, \quad S_1(\varepsilon) = \varepsilon, \\ S_2(A_0) &= A_0, \quad S_2(A_1) = A_1 + A_2, \quad S_2(A_2) = -A_2, \\ S_2(A_3) &= A_3 + A_2, \quad S_2(\varepsilon) = \frac{\varepsilon}{1 - A_2 \varepsilon}, \\ S_3(A_0) &= A_0 + A_3, \quad S_3(A_1) = A_1, \quad S_3(A_2) = A_2 + A_3, \\ S_3(A_3) &= -A_3, \quad S_3(\varepsilon) = \varepsilon \end{aligned}$$

を得る。

そこで上の  $S_0, S_1, S_2, S_3$  が  $T, Q, P$  にどう作用するかを確かめると

$$\begin{aligned} S_0(T) &= T(1 - A_0 \varepsilon), \quad S_0(Q) = Q + \frac{A_0(1 - Q(Q - 1)P\varepsilon)}{P + T - T(Q - 1)P\varepsilon}, \\ S_0(P) &= P \left( 1 + \frac{A_0 T \varepsilon}{P + T - T(A_0 + QP)\varepsilon} \right), \\ S_1(T) &= T, \quad S_1(Q) = Q, \quad S_1(P) = P - \frac{A_1}{Q}, \\ S_2(T) &= T(1 + A_2 \varepsilon), \quad S_2(Q) = Q + \frac{A_2}{P}, \quad S_2(P) = P, \\ S_3(T) &= T, \quad S_3(Q) = Q, \quad S_3(P) = P - \frac{A_3}{Q - 1}. \end{aligned}$$

これらの式と  $W_V$  の生成元の作用を示す式とを比較すれば、 $S_0, S_1, S_2, S_3$  で生成される  $W_{VI}$  の部分群  $W_{VI \rightarrow V}$  の極限が  $W_V$  であることが分かる。

なお極限をとる前のハミルトン系  $P_{VI \rightarrow V}$  は  $\delta_V := Td/dT, H_{VI \rightarrow V} := H_{VI}/(1 + \varepsilon T)$  とおくと

$$P_{VI \rightarrow V} : \quad \delta_V Q = \{H_{VI \rightarrow V}, Q\}, \quad \delta_V P = \{H_{VI \rightarrow V}, P\}$$

と表され、 $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき  $H_{VI \rightarrow V} \rightarrow H_V$  でかつ  $w \in W_{VI \rightarrow V}$  に対して

$$\delta_V w(Q) = \{w(H_{VI \rightarrow V}), w(Q)\}, \quad \delta_V w(P) = \{w(H_{VI \rightarrow V}), w(P)\}$$

であることを注意しておく。これは次節で見る  $(J, K) = (V, IV)$  の場合には若干異なる。

### §3. $W_V$ から $W_{IV}$ へ

ベックルント変換群  $W_V$  の具体的作用は前節で与えた。

ベックルント変換群  $W_{IV}$  は  $s_0, s_1, s_2$  から生成される群で各  $s_i$  は  $\alpha_0 + \alpha_1 + \alpha_2 = 1$  を満たす  $\alpha_0, \alpha_1, \alpha_2$  と  $q, p, t$  に次のように作用する：

$$\begin{aligned} s_0(\alpha_0) &= -\alpha_0, & s_0(\alpha_1) &= \alpha_1 + \alpha_0, & s_0(\alpha_2) &= \alpha_2 + \alpha_0, \\ s_0(q) &= q + 2\alpha_0/(2p - q - 2t), & s_0(p) &= p + \alpha_0/(2p - q - 2t), & s_0(t) &= t, \\ s_1(\alpha_0) &= \alpha_0 + \alpha_1, & s_1(\alpha_1) &= -\alpha_1, & s_1(\alpha_2) &= \alpha_2 + \alpha_1, \\ s_1(q) &= q, & s_1(p) &= p - \alpha_1/q, & s_1(t) &= t, \\ s_2(\alpha_0) &= \alpha_0 + \alpha_2, & s_2(\alpha_1) &= \alpha_1 + \alpha_2, & s_2(\alpha_2) &= -\alpha_2, \\ s_2(q) &= q + \alpha_2/p, & s_2(p) &= p, & s_2(t) &= t. \end{aligned}$$

$P_V$  から  $P_{IV}$  への退化操作を行う変換は

$$\begin{aligned} \alpha_0 &= A_0 + \frac{1}{2}\varepsilon^{-2}, & \alpha_1 &= A_1, & \alpha_2 &= A_2, & \alpha_3 &= -\frac{1}{2}\varepsilon^{-2}, \\ t &= \frac{1}{2}\varepsilon^{-2}(1 + 2\varepsilon T), & q &= -\frac{\varepsilon Q}{1 - \varepsilon Q}, \\ p &= -\varepsilon^{-1}(1 - \varepsilon Q)[P - \varepsilon(A_2 + QP)] \end{aligned}$$

である。

$$\{P, Q\} = 1, \quad \{Q, Q\} = \{P, P\} = 0,$$

$$A_0 + A_1 + A_2 = \alpha_0 + \alpha_1 + \alpha_2 + \alpha_3 = 1$$

に注意する。また  $\alpha_0, \alpha_1, \alpha_2, \alpha_3, t, q, p$  と  $A_0, A_1, A_2, \varepsilon, T, Q, P$  の対応が 1:2 であることに注意する。

先ず、 $A_0 = \alpha_0 + \alpha_3, A_1 = \alpha_1, A_2 = \alpha_2$  の鏡映となる  $W_V$  の元を探す。

$$S_0 := s_3 s_0 s_3 = s_0 s_3 s_0, \quad S_1 = s_1, \quad S_2 = s_2$$

とおく

$$S_0(A_0) = -A_0, \quad S_0(A_1) = A_1 + A_0, \quad S_0(A_2) = A_2 + A_0,$$

$$S_1(A_0) = A_0 + A_1, \quad S_1(A_1) = -A_1, \quad S_1(A_2) = A_2 + A_1,$$

$$S_2(A_0) = A_0 + A_2, \quad S_2(A_1) = A_1 + A_2, \quad S_2(A_2) = -A_2$$

であることが確かめられる。§2 での議論と同様にこれら  $S_0, S_1, S_2$  が  $\epsilon, T, Q, P$  にどのように作用するかを調べる。 $S_i(\epsilon)$  が決まれば  $S_i(T), S_i(Q), S_i(P)$  が決まるので、 $S_i(\epsilon)$  について検討する。例えば

$$S_2(\epsilon)^2 = s_2(\epsilon^2) = s_2((-1/2)/\alpha_3) = -\frac{1}{2} \frac{1}{\alpha_3 + \alpha_2} = \frac{\epsilon^2}{1 - 2A_2\epsilon^2}$$

であるので、

$$S_2(\epsilon) = \epsilon(1 - 2A_2\epsilon^2)^{-1/2}$$

となるべきであるが、 $(1 - 2A_2\epsilon^2)^{-1/2}$  の分枝をどう決めるかという不定性および  $\epsilon \rightarrow 0$  とするとき分枝が唯一つに定まるかという問題がある。直観的には  $A_0, A_1, A_2$  を任意に固定し、 $\epsilon$  はそれに応じて十分に小さいものしか考えないとすれば良いが、 $S_i$  が作用する関数の空間を決めるために、

$$(1+x)^c \sim 1 + \sum_{n \geq 1} \binom{c}{n} x^n$$

に従って、 $(1 - 2A_2\epsilon^2)^{-1/2}$  は定数項が 1 の  $A_2\epsilon^2$  の形式的巾級数と考えることにする。 $\epsilon$  が小さいときはこの級数は収束し、 $\epsilon \rightarrow 0$  のとき 1 に収束する。このような意味で  $S_i(\epsilon)$  は

$$S_0(\epsilon) = \epsilon(1 + 2A_0\epsilon^2)^{-1/2}, \quad S_1(\epsilon) = \epsilon, \quad S_2(\epsilon) = \epsilon(1 - 2A_2\epsilon^2)^{-1/2}$$

という分枝を選ぶことにする。

こうしておく

$$S_0(T) = (T - A_0\epsilon)(1 + 2A_0\epsilon^2)^{-1/2}, \quad S_1(T) = T,$$

$$S_2(T) = (T + A_2\epsilon)(1 - 2A_2\epsilon^2)^{-1/2}$$

を得る。さらに

$$S_1(Q) = Q, \quad S_1(P) = P - \frac{A_1}{Q}$$

$$S_2(Q) = Q + \frac{A_2}{P}, \quad S_2(P) = P$$

が分かる。計算が面倒なのは  $S_0 = s_3 s_0 s_3$  の  $Q, P$  の作用である。複雑な式であるので結果を書き下すのはしないが、 $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき

$$S_0(Q) \rightarrow Q + \frac{2A_0}{2P - Q - 2T}, \quad S_0(P) \rightarrow P + \frac{A_0}{2P - Q - 2T}$$

であることは容易に確かめられる。ただし  $2P - Q - 2T \neq 0$  を満たす任意に固定された  $A_0, A_1, A_2, T, Q, P$  に対して収束するという意味である。

この節の始めに与えたベックルント変換群  $W_{IV}$  と照らし合わせると、 $S_0, S_1, S_2$  で生成される  $W_V$  の部分群  $W_{V \rightarrow IV}$  は  $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき  $W_{IV}$  に収束することが分かる。ただし  $W_{V \rightarrow IV}$  が作用する空間は  $A_0, A_1, A_2, \varepsilon$  の形式的巾級数を係数とする  $T, Q, P$  の有理関数全体からなる体である。

最後にハミルトン系  $P_{V \rightarrow IV}$  がどのように表されるか、 $W_{V \rightarrow IV}$  がそれにどう作用するかを見ておこう。

$$\delta_V = td/dt = (1 + 2\varepsilon T)(2\varepsilon)^{-1} d/dT = (1 + 2\varepsilon T)(2\varepsilon)^{-1} \delta_{IV}$$

であるので  $H_{V \rightarrow IV} := 2\varepsilon(1 + 2\varepsilon T)^{-1} H_V$  とおくと  $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき  $H_{V \rightarrow IV} \rightarrow H_{IV}$  であり、ハミルトン系  $P_{V \rightarrow IV}$  は

$$\delta_{IV} Q = \{H_{V \rightarrow IV}, Q\}, \quad \delta_{IV} P = \{H_{V \rightarrow IV}, P\}$$

と表され、 $w \in W_{V \rightarrow IV}$  に対して

$$\begin{aligned} \delta_{IV} w(Q) &= \left\{ \frac{2\varepsilon}{1 + 2\varepsilon T} w\left(\frac{1 + 2\varepsilon T}{2\varepsilon}\right) w(H_{V \rightarrow IV}), w(Q) \right\}, \\ \delta_{IV} w(P) &= \left\{ \frac{2\varepsilon}{1 + 2\varepsilon T} w\left(\frac{1 + 2\varepsilon T}{2\varepsilon}\right) w(H_{V \rightarrow IV}), w(P) \right\} \end{aligned}$$

が得られる。この最後の結果は前節のものとは異なる。それは  $\delta_V$  は任意の  $w \in W_{V \rightarrow IV}$  と可換であるが、 $\delta_{IV}$  はそうではないからである。

#### 参考文献

- [1] K. Iwasaki, H. Kimura, S. Shimomura and M. Yoshida, From Gauss to Painlevé, Vieweg, 1991.
- [2] M. Noumi and Y. Yamada, Affine Weyl groups, discrete dynamical systems and Painlevé equations, Commun. Math. Phys., **199**(1998), 281–295.
- [3] M. Suzuki, N. Tahara and K. Takano, Hierarchy of Bäcklund Transformation Groups of the Painlevé Systems, preprint.
- [4] K. Takano, Confluence processes in defining manifolds for Painlevé systems, Tohoku Math. J., **53**(2001), 319–335.